

政ちゃんと赤いりんご

小川未明

青空文庫

田舎のおばあさんから、送ってきたりんごがもう二つになつてしまいました。

「政ちゃんなんか、一日に三つも、四つも食べるんだもの。」

「僕なんか、そんなに食べやしない。勇ちゃんこそ三つも四つもたべたんだい。」

二人は、いい争いました。そして、残った二つのりんごを、どちらが大きいか、めいめいでにらんでいました。

一つは、いくぶんか大きいのが、色が青かったです。一つは、小さいが、赤くて美しく見えました。

「僕、この大きなほうを取ろうや。」と、弟の政ちゃんが、すば

しこく手を出して、大きなりんごを握ろうとしました。

「それは、おれのだい。」

兄の勇ちゃんあにいさむは、政ちゃんまさの小さな手ちいでつかんだ、りんごを奪うばつてしまいました。

さあ、たいへんです、二人ふたりは、そこでつかみ合いがはじまりました。畢竟つまり、年の少ない政ちゃんまさは、かないませんでした。

「お母さんかあ、僕ぼくのりんごを兄さんにいが奪とつてしまつたんですよ。」
泣きながら、政ちゃんまさは、お母さんかあのところへ訴うったえてゆきました。

「うそですよ、お母さんかあ。僕ぼくは、大きいから、大きいを取とつたのです。政ちゃんまさは、小さいから、小さいを取とるのがあたりま

えなんですね。」と、いさむ勇ちゃんは、つづいて、お母さんのところへやってきました。

「そんなことは、きまっています。政ちゃんまさの持つてもいるものを、なんで無理むりに奪とつたりするんですか。」

お母さんかあは、こういう場合ばあいには、小さいちいものより、兄さんにいをしかるのがつねでした。

いさむ勇ちゃんは、手てに、青いあお大きなりんごをしつかりと握にぎつていました。そして、お母さんかあの裁判さいばんを、不平ふへいそうな顔かおつきをして、うつむいて聞きいていました。

「田舎いなかのおばあさんは、僕ぼくに、送おくつてくださったんでしよう。」と、政ちゃんまさが、いいました。

「いいえ、みんなに送おくつてくださったのです。」

「それみろ、政まさちゃんは、自分じぶんひとりのものだと思おもっているからいけないんだ。」

「あんな小ちいさいの、やだい。」

政まさちゃんは、からだをゆすつて、だだをこねました。

「もう一つのを、持もつておいで。」と、お母かあさんは、おつしやい
ました。

「僕ぼく、あんな小ちいさいのは、やだい。」と、政まさちゃんは、いいなが
ら、紅あかいりんごを持もつてきました。

「まあ、きれいなりんごだこと、ちよつとお見みせなさい。」
お母かあさんは、目めをみはつて、りんごをごらんになりました。

「こんな、きれいなりんごが、どうしていけないの。あんな青いりんごより、よっほどいいじゃないの。」

「小さいじゃないか。」

「政ちゃんも、さつき、小さいが美しいから、どちらを取ろうかと考えていたくらいですから、お母さんにそういわれると、なるほど、青いりんごより、小さくても、このほうがいいように思われてきました。」

「これを上手に写生してごらんなさい。」

政ちゃんは、学校で、先生が、こんどなんでも持ってきて、図画の時間に写生してもいいと、おっしゃったことを思い出しました。

「僕、これを学校へ持って行って写生してもいいの。」

「みごとに描いたら、おばあさんに送っておあげなさい。どんなにお喜びなされるかしれませんよ。」

政ちゃんの機嫌は、すっかり直りました。このとき、勇ちゃんは、とつくに大きなりんごを持って出てしまつて、いなかつたのであります。

「おなかが痛い。」

勇ちゃんは、朝起きると、腹を押さえていいました。

「おなかが痛いの、どうしたんでしょね。」

「ああ、おなかが痛い。」

「きつと、おなかを冷やしたのでしよう。」

お母^{かあ}さんは、心配^{しんぱい}して、勇^{いさむ}ちゃんのようすを^み見ていられた^た。

「ああわかった。お母^{かあ}さん、兄^{にい}さんは、きのうりんごの皮^{かわ}をむかないで食^たべたからでしょう。ばちがあたったのだ。」

そばで、政^{まさ}ちゃんが、いいました。

「だまつておれ。」と、勇^{いさむ}ちゃんは、怒^{おこ}りました。

「ばちがあたったのだ。」

政^{まさ}ちゃんは、いいました。腹^{はら}を押^おさえて、すわっていた勇^{いさむ}ちゃんが、飛^とび上^あがって、政^{まさ}ちゃんを追^おいかけました。

「お母^{かあ}さん——。」

「生意^{なまいき}気^きいうからだ。」

政ちゃんまさの呼ぶ声よこえと、勇ちゃんいさむの、とつちめている声こえとが、もつれてきこえてきました。

「けんかをする元氣げんきがあれば、だいじょうぶです。」と、お母さんかあは、笑わらっていました。

ふたり
二人は、お膳ぜんの前まえにすわりました。

「もうおなかなかがなおった？」と、お母さんかあは、おききになりました。

「まだ、ちつと痛いたい。」

「お母さんかあ、学校がっこうが休やすみたいからですよ、休やすましてはいけませんよ。」と、政ちゃんまさがいました。

「だれが、休やすむといった。」と、勇ちゃんいさむは、政ちゃんまさをパチン

とたたきました。

「ご飯をたべるときまで、けんかをするのですか。」

お母さんにしかられて、やっと、二人は静かになりました。そして、ご飯をたべて、学校へ出かけました。

政ちゃんは、あの赤い、美しいりんごを紙に包んで、学校へ持ってゆきました。

「きれいなりんごだね。」

図画の時間に、小野がふり向いて、いいました。

「こんなりんごは、めつたに見ないね。どこで買ってきたんだい

。」と、隣の山田が、ききました。

「田舎のおばあさんから、送ってきたんだ。」と、政ちゃんが、

答こたえました。

「たくさん送おくつてきたんかい。」

「ああ、たくさん送おくつてきたんだ。」

「いいなあ。」

「だけど、みんな食たべてしまつて、もうこれきりないんだ。」

「なあんだ、それじゃつまんないな。」

このときです、先せんせい生せいが、大おおきな声こえで、

「横よこを見みたり、話はなしをしたりせんで、上じょうず手てにおかきなさい。」と、

おつしやいました。

政まさちやんは、うまく描かけて、いいお点てんをもらつたら、おばあさ
んのところへ送おくつてあげて、見みせようと思おもつたので、一しよけんめい所しよ懸けん命めい

で描きはじめました。

つぎは、算術の時間でした。ベルが鳴って、みんな教室にはいったときです。

「僕に、りんごをおくれよ。」と、山田がいました。

「僕が、もらう約束をしたんだい。」と、小野がいました。

政ちゃんは、二人が、ほしいというので困ってしまいました。

「ジャンケンおやりよ。」

政ちゃんの机の上のついていたりんごを、ふいに小野が取ってしまいました。

「ずるいやい。」と、叫んで、山田が、それを奪い返そうとしました。ちょうど、昨日、政ちゃんが、兄の勇ちゃんに向かつてや

つたと同じことおなです。

そのとき、もう先生せんせいは、教室きょうしつにおいでになって、じつと

二人ふたりが、りんごを奪うばい合あっているのを見みていられました。二人ふたりは、

大騒おおさわぎをしていました。知しらなかつた政ちやんが、氣きがつくと、

「先生せんせいが。」と、注ちゅう意いしました。

二人ふたりは、びつくりして、争あらそうのをやめたけれど、遅おそかつたので

す。

「小野おのも、山田やまだも、こつちへくるんだ。」と、先生せんせいは、おそろ

しい顔かおつきをなさいました。

「さあ、女おんなの組なくみへいつて勉べん強きやうせい。」

みんなは、女おんなの組なくみへやられるのが、罰ばつの中なかでもいちばん苦くるしか

つたのです。山田は真つ赤な顔をして、先生に引きずられるようにして、連れてゆかれたけれど、小野は柱につかまって、動きませんでした。先生は、小野のわきの下をこそぐりました。それでも、我慢をして、はなれまいと柱にしがみついたので、お席から、くすくす笑う声が起こりました。

「よし、そこに、いつまでもそうやっておれ。」と、山田一人をつれてゆかれました。

「小野、この間に、逃げつちまえよ。」

「逃げたら、後で、よけいにしかられるぞ。」

政ちゃん、この赤いりんごから、たいへんなことが起こったものだ、りんごを拾って、かばんの中に入れてしまいました。

おの 小野が、きょうだん 教壇の上にた 立たされて、あたま 頭をか かいていると、おんな 女の

おざわせんせい 尾沢先生が、やまだ 山田をつれて きょうしつ 教室にはいつてこられました。

「これからき 気をつけて、さわ 騒がないといひますから、どうぞ、ゆる くだだけは、ゆる 許してあげてくださいまし。」と、あやまつてくださいました。

「もう、きつとき 気をつけるね。じや、おざわせんせい 尾沢先生に、れい お礼をもう 申しなさい。」と、せんせい 先生は、やまだ 山田にいわれました。

やまだ 山田は、かお 顔をあか 赤くして、あたま 頭をさ 下げました。そして、やまだ 山田だけは、せき 席にはい いて、みんな みんなといつしよに べんきよう 勉強することをゆる 許され

たけれど、おの 小野は、せんせい 先生のい うことをき かなかつたばかりで、じかん 時間のお 終わるまで、た そこにた 立たされていきました。

「勇ちゃん、りんごをあげようか。」

学校がっこうから帰かえると、政ちゃんまさちはいいました。

「りんご？」といって、勇ちゃんいさむは、かけてきました。

「きのうのりんごじゃないか。政ちゃんまさちは、どうして食たべないの
だい。」

「どうしても、僕ぼくたべたくないのだ。」

「おかしいな。」

お母さんかあも、赤あかいりんごをごらんになつて、

「ほんとうに、くいしんぼうの政ちゃんまさちが、どうしてたべなかつたの。」と、おつしやいました。

政ちゃんまさちは、このりんごを学がっこう校で小野おのと山田やまだが奪うばい合あつて、

先生せんせいに立たされたことを思い出しおもました。それを考えるかんがると、家うちに帰かえつて、かばんからとり出したけれど、どうしても食たべる気きが起おこらなかつたのです。田舎いなかのおばあさんから送おくつていただいただけに、捨すてることもできなかつたのでした。

そのお話をすると、勇いさむちやんは、

「僕ぼく、そんなりんごをたべるのはいやだ。」といつて、あちらへいってしまいました。

「まあ、よくけんかの起おこるりんごですね。このことを田舎いなかのおばあさんにいってあげようかしらん。おばあさんは、きつと兄きょう弟だいげんかをするようなら、もうこれから送おくらないとおつしやるでしょう。」

「もう、けんかをしないから、そんなことをいつてやつちや、いやだよ。」

お母^{かあ}さんは、笑^{わら}って、おうなずきになりました。

このとき、ドン、ドン、と、外^{そと}の方^{ほう}で太鼓^{たいこ}の音^{おと}がしました。

「政^{まさ}ちゃん、りんごをさるにおやりよ。」と、勇^{いさむ}ちやんが、入^いり口^{ぐち}から、のぞいて、いいました。政^{まさ}ちゃんは、赤^{あか}いりんごを持^もつて、かけ出^だしてゆきました。政^{まさ}ちゃんは、赤^{あか}いりんごをさるにやりました。

さるは、りんごをもらって、よろこんで、さるまわしの背^{せなか}中^{なか}におぶさりながら、コスモスの咲^さく、垣^{かきね}根^ねに添^そって、あちらの方^{ほう}へと見^みえなくなつたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 10」講談社

1977（昭和52）年8月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第6刷発行

※表題は底本では、「政《まさ》ちゃんど赤《あか》いりんご」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：仙酔ゑびす

2011年12月1日作成

2012年9月28日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

政ちゃんときりりんご

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>